

ネイチャーライティング再考 ——人新世をめぐる想像力に向けて

結 城 正 美

はじめに

ネイチャーライティングは時代錯誤的な文学ジャンルなのだろうか¹。一九九〇年前後にアメリカで生まれた当初のエコクリティシズムは、ネイチャーライティング研究だったといっても間違いではない。Peter Fritzell, *Nature Writing and America* (1990)、Scott Slovic, *Seeking Awareness in American Nature Writing* (1993) をはじめ、初期エコクリティシズムの研究書はネイチャーライティングを論じたものが多い。そうした個人研究の集積と足並みをそろえるかのように、ネイチャーライティングの作家・テーマ事典 *American Nature Writers* (1996) が二巻本で出版されたことも、エコクリティシズムの基盤形成に大きな役割を果たした。しかし、しだいにエコクリティシズム内部でネイチャーライティングに批判的距離をとる傾向が生まれ、二十一世紀に入るとネイチャーライティングは公然と周縁化されるようになった。なぜか。ひとつには、都市環境や環境正義の問題に批評的関心が移るにつれ、原始的ないし牧歌的な自然に価値をおくネイチャーライティングが偏狭だとみなされたということがある (Armbruster 157)。エコクリティシズムのポストコロニアル的転回を要請した Rob Nixon によってネイチャーライティングにユーロ・アメリカン男性中心エリート主義が指摘されたことの影響も小さく

1 本稿では、とくに言及しない限り「ネイチャーライティング」をアメリカンネイチャーライティングと互換可能な言葉として用いる。

ないだろう (Nixon 234-242)。その一方で、ネイチャーライティングを周縁化する批評動向それ自体を問う向きもある (Philippon; Voie)。なかでも北欧を拠点とするエコクリティック Christian Hummelsund Voie は、“the movement beyond nature writing also invited reductive rhetoric against the genre” と主張し (Voie 200)、ネイチャーライティングをロマン主義的な自然回帰の欲望と結びつけて時代遅れの文学だと見切りをつける傾向が批評の思考停止を招くとして懸念を表している。

本稿では、まず、エコクリティシズムにおいてネイチャーライティングが周縁化されてきた要因について考察する。あらかじめ結論を言えば、ネイチャーライティング軽視の要因は、作品にあるというよりも、自然志向に関する読み手の誤謬にある。ネイチャーライティングは、それが書かれた時代の環境に向き合って現実的な反応を示していると考えられ (Philippon 395; Voie 201)、そのことを作品と批評の分析を通して明らかにする。本稿の最後では、近年の、とりわけ人新世 (the Anthropocene) をめぐる問題が人口に膾炙した二〇一〇年代のネイチャーライティングについて考察する。検討する作品として、ロンドン在住のアイランド系カナダ人作家 Joanna Pocock の *Surrender: The Call of American West* (2019) を取り上げる²。 *Surrender* は、未出版の作家に贈られる Fitzcarraldo Editions/Mahler & LeWitt Studios Essay Prize を受賞した長編エッセイで、 *Times Literary Supplement* や *Irish Times* などの各種メディアおよび学術誌に書評が掲載され、作品に関する著者インタビューも少なくない。アメリカ西部を主な舞台として、鉱山開発、オオカミの

2 エコクリティシズムにおけるネイチャーライティング軽視はアメリカに顕著にみられる。その事象を再考するのであれば、アメリカの作品を検討するのが適切だという見方が当然あるだろう。後に言及するように、イギリスでは近年、ネイチャーライティングの出版および研究が盛んであり、米英のネイチャーライティング研究には温度差がうかがえる。それを認識した上で、イギリスのネイチャーライティングといえる *Surrender* を検討題材とするのは、アメリカ文学やイギリス文学といった地域の枠を問う Dimock と Buell の見解が (Dimock and Buell 1)、エコクリティシズムの現状にも当てはまると考えるからである。

再導入、再野生化の思想と実践、エコセクシュアリティ、気候変動といった今日的な問題が取り上げられているところは、近年の環境文学の傾向と相似する。他方、自然礼讃とも倫理的要請とも異なるかたちで筆を進める手法は独特であり、そこに、人間、ヒトでないもの、テクノロジー、地球環境が絡まりあう人新世の状況をとらえる作家の視点を見とることができる。そうひとまず紹介し、*Surrender* もその系譜に属するネイチャーライティングをめぐる批評動向に目を向けることとしたい。

ネイチャーライティングは終わったのか？

そもそもネイチャーライティングとは何か。*Keywords for Environmental Studies* (2016) の項目説明によれば、科学的事実や自然観察に個人的思索ないし哲学的解説が織り込まれたノンフィクション散文を指す (Armbruster 156)。イギリスの Gilbert White による *Natural History of Selborne* (1789) に端を発し、アメリカでは Henry David Thoreau、Aldo Leopold、Rachel Carson を経て、Edward Abbey、Barry Lopez、Annie Dillard ら多くの書き手によるネイチャーライティングの開花がみられ、「ニュー・アメリカン・ルネッサンス」と呼ばれるほどの興隆をみせた³。一人称ノンフィクションエッセイという共通項を除けば、ネイチャーライティングの定義は一元化されていない (Philippon 392-394; Ray 87-89)⁴。ネイチャーライティングとよばれる作品は多様であり、それゆえ「分類法」が試みられてもいる。言及されることの多い Thomas

3 スコット・スロヴィックは、「重要なネイチャー・ライティングが登場したのは、ソローの死から一九六〇年代後半のいわゆる「ニュー・アメリカン・ルネッサンス」期までの間である」と述べ、一八七〇年代から一九二〇年代にかけては John Burroughs、John Muir、Mary Austin、Henry Beston、その後 Aldo Leopold、Loren Eiseley、Rachel Carson らを経て、一九六〇年代後半の代表的書き手として Edward Abbey、Wendell Berry を挙げている (スロヴィック 10-11)。この「ネイチャー・ライティング・ルネッサンス」は環境危機の深刻化を背景に七〇年代、八〇年代に多くの作品を生み、「一九九〇年代には、環境問題に注目する新しい世代 […] が登場する」(13) と、当時の最新動向を含むかたちで、スロヴィックは、百年以上にわたるネイチャーライティングの動向を要約している。

Lyon の分類法では、ネイチャーライティングには“natural history information, personal responses to nature, and philosophical interpretation of nature”という三つの局面があり、それらの組み合わせによって“field guides and professional papers,”“natural history essays,”“solitude and back-country living,”“man’s role in nature”など七つに分類される (Lyon 20-25)。

言うまでもなく、ネイチャーライティングとは何かということは、定義やその多様性を確認して済むことではない。Daniel Philippon は、Joseph Wood Krutch 編 *Great American Nature Writing* (1950) の序文や Paul Brooks 著 *Speaking for Nature* (1980) にはじまるネイチャーライティング研究を概観し、定義の振れ幅を整理した上で、ネイチャーライティングが環境変化に「現実的な反応」を示しているにもかかわらず「終わった」とみなされる要因は、「自然」を論じる文脈にあるとの見解を示している (Philippon 395)。たしかに、フィリップソンが言及しているように、Carolyn Merchant 著 *The Death of Nature* (1980) で「自然」という概念の死が、Bill McKibben 著 *The End of Nature* (1989) で地球環境への人為的介入による自然の独立性の喪失が宣言された後では、自然を都市社会からの避難所として、すなわち人間社会に対置しうるものとして想定することは楽観的にすぎると言わざるをえない。ネイチャーライティングの特徴のひとつに、工業化と都市化が進む社会を離れて自然に向かうという牧歌的衝動 (pastoral impulse) があるが、その衝動に駆られて、書き手が、概念的にも物理的にも「自然」の終焉が告げられた現実には背を向けているのだとしたら、かれらの作品は自己陶酔的で非歴史的だと非難されても仕方がない。だが、果たしてネイチャーライティング

4 Philippon が論じているように、一人称ノンフィクションエッセイという形式に加え、科学的観察と哲学的思索をあわせもつという特徴が、ある時期までのネイチャーライティングの定義に含まれていた。アメリカ文学研究の重鎮 Lawrence Buell が著書 *The Environmental Imagination* (1995) で、ネイチャーライティングの体現する多分野を環境問題への意識とより結びつけるかたちで“environmental nonfiction”とよびかえてから、ネイチャーライティングの輪郭は滲んできたように見受けられる。

で注視されている自然が〈清らか〉なものであるかどうか。その点は精察を要する。

地理的にみれば、都市に背を向けて自然に向かうという方向性は、二十世紀後半のアメリカのネイチャーライティングに明確に存在する。アビーは西部の荒野へ、ロペスは北極圏へ向かい、ディラードは郊外に見出した野性に耽溺した。しかし、そこで書き手たちが向き合った自然は物理的にも概念的にも〈清らか〉なものだったのかどうか。言うまでもないが、^{ビューアネイチャー}純粋な自然の志向はロマン主義的産物であり、ルソーにさかのぼる。ルソーとその影響を受けた十九世紀ロマン派の書き手たちは、「現実原則のみが支配するこの世界のなかで自己が不適合な存在である」ことを自覚し、そうした世界と断絶して、幼年時代に、夢の世界に、自然に、あるいは虚構の小説的世界に自ら参与することによって、自己の解放と回復を試みた（中川 17-19）。現実原則の彼岸として措定された自然は、自己の魂の回復を願う欲望の投影であるのだから、必然的に、自然という事物を透過した先にある。このようなロマン主義的欲望は、アメリカンネイチャーライティングの祖と目されているエマソンやソローの文章において「超越論的交感の世界」に結実した（野田 146）。アメリカンネイチャーライティングの思想的系譜を分析する野田研一は次のように述べている。「[エマソンやソロー]が見ていたのは「事物」ではない。「事物」が超越論的に変換されるその「透明化」のエピファニクな瞬間こそをみていたのである」（同上）。こうしたロマン主義的自然観は、エマソンやソローの系譜に連なるアビーやディラードにも認められる。しかし、かれら二十世紀後期ネイチャーライター作品には、事物が超越論的に変換され得ないという気づき、あるいは野田のいう「ポストロマン主義」的「葛藤」もまたみてとれるのである（野田 148-153）。この点はディラードを例として後述する。

二十一世紀のエコクリティシズムに顕著なネイチャーライティングの周縁化が、都市に背を向け自然を目指すことをもってロマン主義的だと

みなす見地に立ってなされているのだとすれば、問題は作品にあるというよりも、批評する側の偏見にあるのではないか。ウィルダネスや野性への志向が純粹な自然なるものを措定しているという考え方それ自体が「時代遅れの固定観念」だといえるのであり (Voie 201)、いわば自然志向に関する誤謬がネイチャーライティング批判を増殖させていると考えられる。この誤謬には根強いものがあり、ネイチャーライティングというジャンルに関する固定観念を生み出してもいる。文芸雑誌 *Granta* の *The New Nature Writing* 特集号 (2008) の編者 Jason Cowley にとって、ネイチャーライティングは「古い」と「新しい」ものに分けられ、“old nature writing” が “the lyrical pastoral tradition of the romantic wanderer” にもとづくのに対し、new nature writing は “the discovery of exoticism in the familiar, the extraordinary in the ordinary,” “new ways of seeing” を特徴とするという (Cowley 10-11)。要するに、「古い」ネイチャーライティングは終わったが、新たなかたちで再生している、との見解である。興味深いことにとすべきか、カウリーが挙げている「新しいネイチャーライティング」の特徴はいずれもロベスやディラードに明確にうかがえるものばかりだ。じっさい、カウリーは特集の巻頭言でロベスを高く評価しており、彼の代表作 *Arctic Dreams* (1986) を、同じく極北を舞台とする *Into the Wild* (1996) と対置させている。映画化されてもいる *Into the Wild* は、才気煥発な青年 Christopher Johnson McCandless が真理を求めてアラスカのウィルダネスへ向かい、そこで非文明的生活を独力実践した末に命を落とす、という実話にもとづいた作品であり、カウリーにとってこれがネイチャーライティングの典型であるらしい (Cowley 7)。アラスカのウィルダネスを理想化するクリス・マカンドレスの自然観が「古いネイチャーライティング」の特徴だというのであれば、ロベスもアビーもディラードもその部類には入らず、むしろ、カウリーのいう「新しいネイチャーライティング」の開拓者にほかならない。カウリーの解説は、それがイギリスのネイチャーライティングに向けられているもの

だとはいえ⁵、自然志向に関する誤謬がネイチャーライティングの評価を混乱させている一例だといえるだろう。

作品の評価が批評のトレンドに左右されることはネイチャーライティングに限ったことではない。Richard Brautigan の優れた訳者として知られる藤本和子は書いている。ブローティガンヒッピー・ムーヴメントの寵児のように扱った批評界が、その運動が表層から消えるや、いとも簡単にブローティガンを捨てた、と（藤本 96）。また、『アメリカの鱒釣り』所収「ヘイマン・クリークに鱒がのぼってきた最後の年のこと」が、環境汚染への警告であるとか消費社会への批判を象徴していると解釈されることに触れて、こうも書いている。

環境汚染に反対すること、消費社会を批判すること、手づくり生活の終焉をなげくこと、みな大切だ。でもそれらの問題を、ヘイマンの旦那の話のようなものに当てはめてしまって、どのような発見があるのだろうか。発見がない非難は、なんと不毛だろう。

きまり文句はきまり文句である。もちろんそれなりの正しさとエネルギーと魅力をもっているが、想像力をすててしまったきまり文句はゆきづまる。（藤本 127-128）

同様のいらだちは、ネイチャーライティングを研究している野田にもうかがえる。アビーに代表されるようなポストロマン主義的文学実践は「環境保護主義的に過度な倫理的脅迫ではない。むしろ、人間の知の構

5 ASLE-UKI（イギリスとアイルランドの文学・環境学会）の学会誌 *Green Letters* の 21 世紀イギリスとアイルランドのネイチャーライティング特集の編者は、アメリカンネイチャーライティングを知る者からすれば *Granta* の *The New Nature Writing* 特集に新奇性はないと述べる一方で、特集がイギリスにおけるネイチャーライティングの興隆を捉えていることを評価している（Stenning and Gifford 1）。イギリスでは、二十一世紀に入って、Robert Macfarlane の *The Wild Places*（2007）や Kathleen Jamie の *Findings*（2005）をはじめとするネイチャーライティングが注目を集め（Smith 3）、上述の学会誌 *Green Letters* の特集や Jos Smith の *The New Nature Writing*（2017）等、研究も盛んである。

造を問い直す認識論的要請なのだ」という言明は（野田 148）、自然保護や環境正義という「きまり文句」を作品読解に適用し「倫理的脅迫」に加担していることに無自覚なエコクリティックに向けられているといっている。そして、藤本と同じく野田もまた「想像力」に重きをおいている。

なぜ、文学が環境問題に向かおうとするのか。それは、まさしく想像力の問題を内包しているからである。沈黙する他者、声も主体もない他者、をめぐる想像力。自然を、その強いられた沈黙から解放し、その声と主体を呼び返す、そのような想像力のことである。（野田 25）

「想像力をすててしまったきまり文句はゆきづまる」ということをネイチャーライティングの批評動向に鋭く感じ取っているがゆえの確言である。

ネイチャーライティングの興隆をニューアメリカンルネサンスと称したスロヴィックは、一九九三年のインタビューでこう述べている。ネイチャーライティングを読み、語る目的は、「思考と内省、議論と対話を喚起することであって、けっして環境問題をめぐる唯一無謬のイデオロギーを打ち出そうとするものではない」と（スロヴィック 15）。先に引いた野田の主張は、このスロヴィックの見解と二十年以上の時間的隔たりがあるが、内容は明確に呼応している。その二十数年のあいだに、ネイチャーライティングは環境危機の現実に向き合っていないという批判が強まったわけだが、では、自然・環境をめぐる認識のアップデートが進むなかでネイチャーライティングはどのような「思考と内省、議論と対話を喚起」しているのか。それを次に検討することとしたい。

環境危機に分け入る想像力

二十世紀後期のネイチャーライティングには、工業化する都市からの避難所あるいは真理の源泉としてウィルダネスを熱狂的に礼賛するものもたしかに存在する。しかし、物理的かつ概念的に更新し続けている自然・環境に向き合っている作品は少なくない。一見するところ自然への逃避にみえるネイチャーライティングの牧歌的衝動は、必ずしも自然を規範としてみる欲望だけを指すのではなく、そうした欲望をめぐる再起的な問いを秘匿していると考えられる。

アニー・ディラードを例にとってみよう。ネイチャーライティングで語られる自然は環境危機の時代にはもはや存在しないとしてその「死」を宣告した Moira Farr のエッセイ “The Death of Nature Writing” (1993) で、ディラードは “the last human being who could, in any convincing way, write about nature as though it were wholly clean (even at its most horrific) and inspirational” と指摘されている (Farr 19)。ディラードの代表作 *Pilgrim at Tinker Creek* (1974) は、ネイチャーライティングの正典としてゆるぎない地位を得ている——それゆえネイチャーライティングへのバックラッシュが生じると批判的にもなった——が、そこで観察され思索され書き綴られている自然は、ファーが言うように「(最も怖ろしい面すらも) 清らかで、靈感を与える」もののように見える一方で、そうしたロマン主義的自然観に収まらない不気味さをまとっている。

『ティンカークリークのほとりで』の舞台は、ヴァージニア州ロアノークの郊外を流れるティンカークリークとその周辺で、語り手である「わたし」はクリークのすぐそばに住んでいる。ブルーリッジ山脈にかかるそのあたりは、いわゆる自然ゆたかなところで、カエル、オオタガメ、カマキリ、ザリガニ、アメンボ、トンボ、アメリカササゴイ、ウサギ、リス、ジャコウネズミなど多くの生きもの、そして水の流れや存在感のある木々が、語り手を惹きつける。対照的に、人間は——語り手が言及する多数の本の著者を除いては——ほとんど登場しない。そうした

隠者然とした自然の摂理の探究にソローの影響をみてとることは難くない。全十五章から成るこの作品は、前半が自然の法則とその神秘を確認してゆく「肯定の道 (via positive)」の手法をとり、それが第八章「複雑さ」で最高潮に達した後、第九章「洪水」ですべてが流され、後半は自然の摂理をめぐる認識が根底から揺さぶられる「否定の道 (via negativa)」をとる。その後半のはじまりにあたる第十章「繁殖力」の冒頭で、“the landscape of the intricate world that I have painted is inaccurate and lopsided. It is too optimistic” と (Dillard 161)、作品前半で展開された考え方が楽観的に過ぎたという見解が示され、「否定の道」が予告される。

生きものの旺盛な繁殖力と、それに付随する生命の浪費（と語り手がとらえるもの）を、自然の摂理としてどうとらえればよいのか。フジツボは四年ほどの寿命が尽きるまで、脱皮を繰り返しながら自己再生する。脱皮後の小片が無数に漂う海水はさながら「フジツボのかけらのスープみたい」だと述べた直後、ディラードと重なる語り手は、それが何百万何千万という人間の子どもだったら現実味があったかしら、と問い、種や集団としての生命の連鎖と個々の生命を重視する価値観の噛み合わなさに囚われる (Dillard 166)。語り手を悩ませるのは個体数の膨大さだけではない。クサカゲロウは、幼虫時代に夥しい数のアブラムシを食べ、成虫になるとすぐ交尾して産卵するが、受精卵を葉の表面に産みつけていく最中に、おそらく空腹のためか、後ろを向いて産んだばかりの卵を次々に食べてゆく。そしてまた産んで、また食べる。交尾をしながら共食いするプラナリア、生まれたばかりの仔猫を舐めまわしながら突然腹のあたりから食べ始める母猫。これらは、語り手が観察や書物から得た事例のほんの一部に過ぎないが、自然界の不条理にとり憑かれた語り手は、“Either this world, my mother, is a monster, or I myself am a freak” と自問し (Dillard 177)、自然界の営みと人間の価値観が折り合わないことに呻吟する。ここには、自然を規範とみる見方の脱自然化がみてとれる。ネイチャーライティングに見切りをつける批評家は、この点

を見落としているのではないか。個々の生命に対する自然の無関心を前にして半狂乱になり、価値観を根底から揺さぶられるディラードと重なる語り手は、きわめて今日的な問題に向き合っているというべきであろう。

「今日的な問題」とは曖昧な表現であるが、あえてそう記したのには理由がある。ごく普通に考えれば、今日的な問題とは、地球温暖化や密林伐採や環境正義や気候変動といった地球環境問題を指す。ファーが「ネイチャーライティングの死」を執筆した一九八八年は地球温暖化が大きな社会問題となった時期であり、環境に意識的な書き手としてファーは夏の異常な暑さを憂いながら、環境危機に向き合う文学のあり方を模索していた。そのようなときに出会ったディラードの作品をファーは“Visions don't come much clearer, or voices much saner, than Dillard's”と激賞し (Farr 18)、ディラードが綴る創造の神秘や不可解さに人々の関心が向かっていれば、空気は汚れていなかっただろうし、通りには腐臭を放つゴミが散乱していなかっただろうし、母乳がダイオキシンで汚染されることもなかっただろう、と「悲しみ」をもって記している (Farr 19)。その悲しみは、環境問題が“our willful ignorance of the facts of creation Dillard learned to behold and celebrate”にあるという気づき (Farr 19)、すなわち環境的想像力の欠如に対する憂いに由来するものである。『ティンカークリークのほとりで』が出版された一九七四年とファーがそれを読んだ一九八八年のあいだに“the possibility that an affirmative philosophical and spiritual discourse . . . could arise from nature in its 'pure' form, had vanished”と記し (Farr 19)、「ネイチャーライティングの死」を告げるファーの言葉には、ディラードへのリスペクトが込められているのである。言い換えれば、「ネイチャーライティングの死」というエッセイはディラードへのオマージュにほかならない。『ティンカークリークのほとりで』から得られるような環境啓発——それは藤本や野田のいう「想像力」と重なる——は環境問題の甚大さを示す数値やデータか

らは得られないというファーの見解は (Farr 20)、地球環境問題という現実にもどのように向き合うかという、きわめて今日の問題を提起している。

前述した藤本や野田にみられるような、環境問題をめぐる善悪やイデオロギーを作品読解に適用することに意味はないという見解を、ファーも共有している。その一方で、ファーは環境危機という現実から目を逸らすことができない。「ネイチャーライティングの死」でファーは、環境問題がさほど深刻でなかった時代のネイチャーライティングを敬意をもって弔い、環境危機という現実に向き合う新たな文学的想像力を模索しているのである。先述した *Granta* の「新しいネイチャーライティング」特集号も、その裏表紙の宣伝文に、経済移民や人口過剰問題や気候変動が環境を見知らぬものに変えている状況において “our conception and experience of nature changes, so too does the way we write about it” とあるように、環境問題を明確に意識して書かれたネイチャーライティングへの志向を示している。ネイチャーライティングが「終わった」のではなく、ファーがディラードに、カウリーがロペスに啓発されたのと同じような強度で環境危機の現実に分け入ることができる想像力が、現在のネイチャーライティングに求められているのである。

環境問題をめぐる価値判断を文学作品に当てはめても発見はない。環境主義的喧伝を拡散するだけで、はっきり言って不毛である。しかし、だからといって環境問題に触れないことが適切であるわけでもない。とりわけ、人間の活動が地球環境を見知らぬものに変え、その結果、人間（だけでなくあらゆるもの）の生存が不確実になっている人新世の状況においては、環境問題は、個人や社会が取り組むものとして対象化されるにとどまらず、意識にのぼることがない程度にまで日常に隈なく織り込まれている。人間が「地質学的脅威 (geological force)」とみなされる人新世においては、日常の何気ない活動が——いまパソコンでこの論考を書いているということも例外ではない——地球環境を見知らぬものに変えることに関与しているという事実がデフォルトなのである。気候変

動が「^{ノーマル}正常の終焉」を招き寄せ (Wallace-Wells 25)、何が正常であり正しいかを測る^{ノーマル}規範がわからなくなった人新世の状況に、ネイチャーライティングはどのように応答しているのか。Joanna Pocock, *Surrender: The Call of the American West* を例として考えてみたい⁶。

混沌にそっと触れる〈スケッチ〉という思考

日常のあらゆる行為と地球環境問題が相互に絡みあっているという認識は、*Surrender* の通奏低音となっている。それが説明的に示された箇所を引用しよう。

While I typed away at my MacBook Pro, I was keenly aware of the arsenic and copper inside it, both of which were probably mined in Chile. I knew that the process of pulling these elements out of the ground was killing whole villages and poisoning rivers. In the Republic of Congo, children as young as seven are digging cobalt out of the earth with their bare hands. Their lives were being cut short so my battery could have a long one. It was the same story for the bismuth from Mexico, the gallium from Guinea, the cadmium, chromium, manganese and platinum from South Africa, the lithium from Zimbabwe, the mercury from the only mercury mine in the world in Kyrgyzstan, the vanadium from Kazakhstan, the antimony from Tajikistan, and so on. But every morning I powered up my computer, made a cup of coffee, and scrolled through the petitions in my inbox: dozens of

6 フィッツカラルド社のエッセイ賞受賞作品として同社から出版された当初、*Surrender* には副題は付いていなかった。“The Call of the American West”という副題は、北米で市場流通版が刊行されたときに加えられたようである。作品の主要舞台を示しておこうという読者への配慮なのか、あるいは「アメリカ西部」という言葉のもつ市場価値を利用した戦略なのか、いずれにしても示唆に富む副題である。後述するように、人新世の状況を実感を伴うかたちで考えることをアメリカ西部が可能にしているのだとすれば、アメリカ西部というトポスを検討しないわけにはいかないが、それは別稿に譲ることとしたい。

them every morning, asking for money to combat child labour, to save the orangutan, to clean up rivers running orange from the mining of copper used in the making of my computer. (Pocock 129-130)

執筆や通信の道具であるパソコンには、半導体材料のヒ素、基板材料のコバルトや銅、ほかにもカドミウム、バナジウム、クロムなど多くの重金属が使われており、なかでもレアメタルとして知られるものは「現在の産業には無くてはならない素材」である（渡邊 168、163）。その生産は途上国の児童労働や環境破壊を助長しており、そうした問題を啓発する運動も盛んに展開している。引用した一節には、このようなテクノロジーの両義性が、価値判断を介在させないかたちで淡々と綴られている。

パソコンのバッテリーの寿命と引き換えに途上国の人のいのちと環境が削られている。問題がパソコンにあるのならそれを使わないという解決策が考えられ、じっさい、現代テクノロジーと縁を切る「再野生化 (rewilding)」という生き方を実践している人もいる。しかし、再野生化実践家たちはインターネットや SNS を利用しない限り孤絶し、共同体をつくることができなければ狩猟採集にもとづく生活は続けられない。Surrender にはそのような現状も描かれている。生物圏における人と環境の関係に加え、人間、テクノロジー、地球環境がもつれあった「技術圏」^{テクノスフィア}をめぐる問題にポコックは向き合っているのである。

“Human force within the Earth system is exercised through and within the framework of the technosphere” と指摘されるように（Horn and Bergthaller 80）、人新世的状況における人間と環境の関係を考える上で技術圏という参照枠は必須である。技術圏とは聞き慣れない言葉であるかもしれないが、スマホやパソコン、電気、ガス、上下水道、車や電車などの生活インフラを考えてみるだけでも、いかにわたしたちが技術圏内で日常を営んでいるかということがわかるだろう。技術圏を念頭におくと、人新世における主体は、人間でも資本主義社会でもなく、“a concrete

‘assemblage’ of people, infrastructures, forms of consumption, economies, and energy regimes within the technosphere” ととらえられてくる (Horn and Bergthaller 80)。先の引用で、パソコン使用が環境問題に加担する一方でその改善に向けた啓発の促進に一役買っているというテクノロジーの両義性が淡々と綴られていたが、あの語り口に、人やインフラや経済が絡みあった「アッセンブリッジ」としての人新世の主体を垣間見ることができると考えるのは行き過ぎだろうか。

鉦山開発は、仕事をもち町を潤す一方で、確実に環境を破壊している。狼の再導入にも立場によって異なる見方が存在する。そのように、環境問題をめぐる事象を価値判断を保留して綴るポコックの文体を、ある書評家は「スケッチ」と形容している。

Pocock’s prose is understated and spare, and like a cave painting, does perfect justice to her subject. It doesn’t debate the living world by trying to overword it. It is just a sketch, and in its gentleness touches it perfectly, like petting a flighty animal. This is nature writing that we need: standing in contrast to writing that forces the human into the picture as observer, or tries hard to pin the things down exactly, with alienating expertise or florid description. (Andrews n.p.)

問題を傍観するでも論破するでもなく、落ち着いた動物をやさしく撫でるように、ときに口角泡を飛ばして議論される環境問題の現状にそっと触れ、スケッチする。そのような文体それ自体にポコックの思考が反映されている。

Surrender の随所で、語り手は、生態系ピラミッドの頂点としての predator ではなく prey として自分をとらえたいと語る。この欲望は、哲学的思索に深められることも、情熱的に語られることもなく、スケッチ風に綴られる。書名の由来でもある *Surrender* というエコセックス集会

で、Mother Earth ではなく Lover Earth というエコセックス的パラダイムに語り手は惹かれるのだが、ある晩、夕食をとりながら参加者同士でおしゃべりしているときに、愛し合う対等な他者として地球に接するということが話題にのぼる。

... someone brought up the idea of consent--how could having sex with the Earth ever be consensual?

I said, 'Well who said you had to do anything *to* the Earth? Maybe you could let it do things *to you*.' (Pocock 249)

自分から地球に何かをするというのではなく、地球が自分にはたらきかけるにまかせるという見方は、being prey の一側面を示すものであろう。この語り手の見解に皆は感心するのだが、話はそこで終わる。まさにスケッチである。自身と重なる語り手の思考を、夕食の場面の一コマとしてスケッチするポコックは、事象だけでなく自らの思考すらも、そっと触れるかたちで綴っているのである。

ロマン主義のネイチャーライターは、現実原則の抑圧からの自由を自然のうちに見出したが、その自然とは自らの欲望の謂いにほかならなかつた。ポストロマン主義の書き手たちにとっては、自然の事物性は透過されえず、それゆえ自然の摂理をめぐる葛藤が生じた。気候変動が「正常の終焉」をもたらした人新世的状況においては、現実原則も自然の摂理もそれ自体が不確実である。そのような混沌を、ポコックはそっと触れるようにスケッチしてゆくわけだが、そのような試みに、人新世という問題へのネイチャーライティングの応答の一端が見てとれるのではないだろうか。

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00413 を受けたものです。

引用参考文献

- Andrews, Abi. "Surrender by Joanna Pocock: toes the thin line between beauty and horror wonderfully." *The Irish Times*. 2 August 2019. Online. (Accessed 1 May 2021)
- Armbruster, Karla. "Nature Writing." *Keywords for Environmental Studies*. Edited by Joni Adamson, William A. Gleason, and David N. Pellow. New York UP, 2016, pp. 156-158.
- Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Harvard UP, 1996.
- Cowley, Jason. "Editor's Letter: The new nature writing." *Granta* 102 (The New Nature Writing), 2008, pp. 7-12.
- Dillard, Annie. *Pilgrim at Tinker Creek*. 1974. HarperPerennial, 1988. [アニー・ディラード『ティンカークリークのほとりで』金坂瑠美子、くぼたのぞみ訳、めるくまーる、1991年]
- Dimock, Wai Chee, and Lawrence Buell, editors. *Shades of the Planet: American Literature as World Literature*. Princeton UP, 2017.
- Farr, Moira. "The Death of Nature Writing." *Brick* 47, 1993, pp. 16-27.
- Lyon, Thomas J. *This Incomparable Land: A Guide to American Nature Writing*. Milkweed, 2001. [1989年刊初版の邦訳として、トーマス・J・ライアン『この比類なき土地——アメリカン・ネイチャーライティング小史』村上清敏訳、英宝社、2000年]
- Nixon, Rob. *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Harvard UP, 2011.
- Philippon, Daniel J. "Is American Nature Writing Dead?" *The Oxford Handbook of Ecocriticism*. Edited by Greg Garrard. Oxford UP, 2014, pp. 391-407.
- Pocock, Joanna. *Surrender: The Call of the American West*. House of Anansi P, 2019.
- Ray, Sarah Jaquette. "Nature Writing and the American West." *A History of Western American Literature*. Edited by Susan Kollin. Cambridge UP, 2015, pp. 82-97.
- Smith, Jos. *The New Nature Writing: Rethinking the Literature of Place*. Bloomsbury, 2017.
- Stenning, Anna, and Terry Gifford. "Twentieth-century nature writing in Britain and Ireland." *Green Letters: Studies in Ecocriticism*, vol. 17, no. 1, 2013, pp. 1-4.
- Voie, Christian Hummelsund. "Nature Writing in the Anthropocene." *Routledge Handbook of Ecocriticism and Environmental Communication*. Edited by Scott Slovic, Swarnalatha Rangarajan, and Vidya Sarveswaran. Routledge, 2019, pp. 199-210.
- Wallace-Wells, David. *The Uninhabitable Earth: Life After Warming*. 2019. Tim Duggan Books, 2020. [デイビッド・ウォレス・ウェルズ『地球に住めなくなる日』藤井留美訳、NHK出版、2020年]
- スロヴィック、スコット「アメリカン・ネイチャー・ライティングの現在」野田研一訳『フォリオ a』2号（特集：〈自然〉というジャンル／アメリカン・ネイチャー・ライティング）ふみくら書房、1993年、pp. 8-16.
- 中川久定「底流としての「ルソーとロマン主義」『現代思想』臨時増刊（総特集＝ルソー）vol. 7.16、1979年、pp. 16-31.
- 野田研一『失われるのは、ほくらのほうだ——自然・沈黙・他者』水声社、2016年。

藤本和子『リチャード・ブローティガン』新潮社、2002年。

渡邊泉『いのちと重金属——人と地球の長い物語』筑摩書房（ちくまプリマー新書）、
2013年。